よしづがわいせきはっくつちょうさげんちせつめいかい
吉津川遺跡発掘調査現地説明会

1　吉津川遺跡へようこそ

三条市教育委員会では、国道４０３号三条北バイパス道路建設工事に伴い、新潟県より委託を受けて、三条市大字下保内地内にある吉津川遺跡の発掘調査を７月から行っています。この調査により発見されたムラの跡や当時の生活用具などの実物を現地で見学していただき、先人が残してくれた地域の財産である遺跡の保護にご理解をいただければ幸いです。

吉津川遺跡から三王山古墳群を望む

吉津川遺跡は、今から 1600 年ほど前の古墳時代前期のムラの跡です。調査により、溝に囲まれたイエや平地式のイエの跡などが発掘され、多量の土器や穀物類、桃の種のほか、土製品や石製品などが出土しています。ムラの縁辺部には、川が流れていて、櫂の一部も見つかっています。

遺跡からは、山手にある保内三王山古墳群を望むことができます。

発掘されたムラの跡
（上層面：地表下 120cm）

当時の人が生活していた地表面が、３面みつかっています。上層面は現在の地表面から 120cm 下に、中層面は 150cm 下に、下層面は 180cm 下にあります。上層面の調査は一部で終了し、左の写真のようなイエの跡などが発掘されました。

調査中のムラの跡（中層面：地表下１５０ｃｍ）

現在の地表面から 150cm 下にある中層面を調査中です。今回の現地説明会で見学していただきます。

2　発掘された吉津川遺跡

溝で囲まれたイエ

溝で囲まれたイエは、かつては円を描く溝の形から墳墓と考えられていましたが、最近では弥生時代から古墳時代にかけて沖積地で造られた住居のあり方の一つと考えるようになりました。

この遺跡ではこの一例しか発見されていません。

溝は、一辺が 20 ｍほどの正方形を描くように一周します。溝に囲まれた中島の中央には、縦横８ｍほどの正方形をなす住居の床面（写真②）が残されています。４本の柱のうち、１本が地中に埋められたまま発見されました（写真④）。中央付近に、火を焚いたいろりの跡があります。溝が切れている南側が、入口と考えられます。

この建物が特殊なのは、溝を持つからだけではありません。他の遺構が、川の氾濫などによって壊れて廃絶しても、この建物と周りの溝だけは同じ場所へ何度も作り直されているのです。造られた当初の溝は幅が最大で３ｍもありましたが（写真③）、何度か掘り直された後、溝の幅は１ｍほどになりました（写真①）。

また、出土した遺物も特徴的なものです。溝の底や建物の床面から、他の遺構からはあまり多く発見されない朱塗りの高坏（写真⑥･⑩）や、壺などを載せる器台（写真⑪）が大量に発見されました（写真⑤・⑫）。これらは、毎日の暮らしに使われたものではなく、まつりごとなどに使用されていたとされる土器です。床面でひときわ目立つ緑色の石（写真⑧）は、首飾りなどに使われる勾玉・管玉の原料と考えられます。その完成品は、集落の近くにある三王山古墳の出土品に見ることができます。

これらのことから、この建物は、ムラの有力者がいた場所と推測することができます。

この地に立って遠く眺めることの出来る三王山古墳、その被葬者が、この建物の主だったのかもしれません。

イエの最終的なかたち（上層面）

建物が建っていたところ

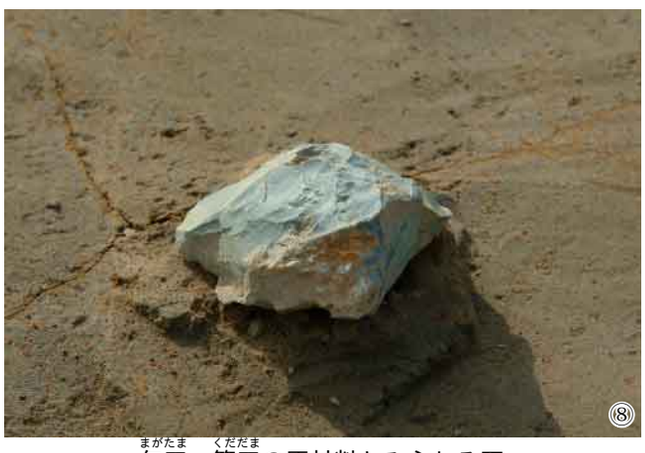
イエが造られた当初のかたち（中層面）

発見された柱

床面にちらばった土器の破片

床面に転がるかたちで発見された高坏

床面に置かれた鉢



勾玉・管玉の原材料とみられる石

溝の底面で見つかった高坏

溝の底面で見つかった高坏（近景）

発見された器台

溝の底にちらばるたくさんの土器

平地式のイエ

この遺跡では平地式のイエと考えられる跡が何軒も見つかっています。イエの見つかる深さには1.2 m～1.5 mと差があり、今回、見学してもらうのは今の地表面から大体1.5 mくらいの深さにあったイエです。

平地式のイエは、地面を深く掘らずに、床の部分を浅く平らに整えて、屋根を葺き、四方に壁を廻らせて、土間に寝起きをした住まいと考えられています。

このイエはほぼ正方形で、輪郭部分に幅５㎝ほどの周溝と呼ばれる細い溝が廻ります。イエの内側には炭化材の広がりがあり、土間の中央西寄りに火を使ういろりの跡が見つかりました。面積は20 ㎡弱で、畳に換算すると12畳くらいの広さになります。今のところ柱穴は見つかっていませんが、建物を支える柱はあったものと考えています。

イエの床面からは、当時の生活に使われた土器がほぼ完全なかたちのまま10個ほど見つかっています。最も多いのは煮炊きに使う甕ですが、大きさの違うものがあることから、使い分けをしていたことがわかります。食べ物を盛ったり飲み物を入れたりする食器のような使いみちの高坏と小形の鉢や小形の壺も一緒に見つかっており、同時に使われた土器の組み合わせを知る上で良好な手掛かりになるものです。ただし、食

平地式のイエの跡

西上から見た平地式のイエの跡。大きさは一辺が約4.4 mのほぼ正方形で、壁下に幅５㎝前後の狭い溝がめぐります。生活していた床の上には炭化物が大きく３箇所で見つかり、右側の方がいろりの跡と考えられます。イエの中には10個のほぼ完全な形を保った土器が残っていました。

器の数は少ないので、特別な使い方がされて、日常的には木製の器などが用いられていたかも知れません。

これらのイエから出土する土器には、大きな変化が見られないことから、古墳時代前期の吉津川ムラは何度かの浸水を受けたものと思われます。

ほぼ同じ頃の台地上の遺跡では、竪穴式のイエが作られていますが、この遺跡では現在のところ平地式のイエだけが見つかっていることから、吉津川ムラの人々が標高の低い沖積地に適したイエの作り方を採用した可能性があります。

床面上に残された土器

小型丸底壷（左側）と高坏（右側）

小形の鉢

煮炊き用の甕

土坑

土坑（SK310）は、長さ 150cm、幅 90cm、深さ 25cm のゆがんだ長楕円形を示します。内部からは３種類の土器の破片が出土しました。煮炊き用の甕と甑と小形の鉢で、異なる用途の土器の組み合わせが判ります。

土坑（SK310）

その他の出土品

炭化穀物

１６００年前の穀物も炭化するとこのように腐らずに見つけることができます。一粒が２㎜ほどの大きさです。

炭化種子

ほぼ同じ頃の桃の種です。割と数多く見つかります。

土製品

現在発掘作業中の場所から、管状土錘と呼ばれる漁網に付けられた重りが出土しました。まだ周辺の調査をしていませんので詳細は不明ですが、土錘の近くからは多くの土器や炭化物も見つかっていますので、漁業に従事した人のイエの可能性もあります。

川跡

遺跡の北東端にテラス状の浅い段が付いた昔の水辺の一部が見つかっています。1600 年経った今でも水が湧き出していることから、泉のような場所だったのかも知れません。また川跡の中からは木の杭や櫂の一部が見つかっていますので、このムラの船着場(入り江)だった可能性もあります。

昔の水辺

川の中から見つかった櫂の一部

遺跡から粟ヶ岳を望む

遺跡から弥彦山を望む

吉津川遺跡で出土したいろいろな土器

高坏（たかつき）

坏（つき）(現在のお茶碗のようなもの) に高い台をつけたもので、こういう名前で呼びます。食物を盛るのに使いました。

小型丸底壺（こがたまるぞこつぼ）

底が丸いので、器台（きだい）の上にのせて使用します。まつりごとに用いたもので、普段の食事などで用いたものではありません。

器台（きだい）

小型丸底壺（こがたまるぞこつぼ）をのせる台です。高坏（たかつき）とよく似ていますが、中心部に穴が開いています。

鉢（はち）

食物を盛ったり、貯蔵したりするのに使います。

壺（つぼ）

穀物類（こくもつるい）や、水などを貯蔵（ちょぞう）するのに使います。

甕の内面に残っているおこげ

甕（かめ）

煮炊（にた）きに使います。一時的な運搬用としても利用可能ですが、調理鍋（ちょうりなべ）のような使用を前提として薄手ながら比較的頑丈に造られています。

底には穴があけられています

甕の上に乗せて使われます

甑（こしき）

甕（かめ）の上にのせ現在の「蒸籠（せいろう）」のように米などを蒸すのに使用しました。ただ出土するのは数少ないので、日々の調理に使用したものではないようです。

地割れの跡

昨年度の調査で見つかった地割れ断層のほぼ真下に、同じ南北方向のひび割れが確認できました。昨年の浅い地割れ面では、割れ口に黒色土が挟まっていましたが、やや深い今回は地滑りのように東側へ滑り落ちた様子が観察されました。

北側から見た地割れの様子

ほぼ南北方向に確認された地割れ断層の跡です。土層の断面を観察すると、この幅で割れたのではなく、地面が開いた直後に写真左側が 10 ㎝前後低くなって閉じたようです。

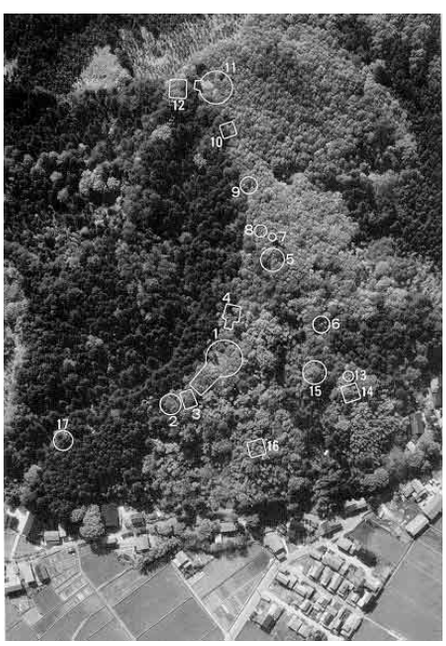
地割れの土層断面

南側から断面を観察した状態です。中央部の縦に走るひび割れを境に、写真右側がずり落ちている様子を確認できます。

三王山古墳群と吉津川遺跡

吉津川遺跡に、古墳時代のムラが営まれたころ、南みえる山地には、この地域を支配した豪族のお墓である前方後円墳などの三王山古墳群が造られました。

古墳は、支配した地域を一望できる場所に造られます。このことから、吉津川遺跡は三王山古墳群に眠る豪族と密接に関係するムラの一つと考えられます。



山の尾根沿いつくられた三王山古墳群

１１号墳から出土した副葬品